

趣味活動を獲得した在宅片麻痺患者の特徴

閑野 智¹⁾ 石森 卓矢¹⁾ 風晴 俊之²⁾ 美原 盤³⁾

1) 公益財団法人脳血管研究所 附属美原記念病院 訪問看護ステーショングラウチア
リハビリテーション部門

2) 公益財団法人脳血管研究所 附属美原記念病院リハビリテーション科

3) 公益財団法人脳血管研究所 附属美原記念病院 神経内科

[目的]訪問リハビリテーション（リハビリ）は、心身機能の維持向上を図り、日常生活の自立を助けるために行われるリハビリである。我々は、Activities of Daily Living（ADL）自立から寝たきりまで、さまざまな利用者に対し、訪問リハビリが介入することで ADL が改善することを報告した。しかしながら、訪問リハビリの役割は ADL の改善のみならず、趣味活動の獲得など社会参加を推進することが重要である。実際の臨床場面では、後遺症が残存する脳卒中片麻痺患者において、趣味活動の獲得に難渋するケースに遭遇することは少なくない。そこで今回、訪問リハビリを利用し、趣味活動を獲得できた脳卒中片麻痺患者の特徴を調査した。

[対象]2013 年 7 月から訪問リハビリを開始し、2017 年 10 月までに終了した患者 292 名のうち、訪問リハビリ開始時には趣味活動を行っていない脳卒中片麻痺患者 69 名（男性 42 名、女性 27 名、年齢 70.3 ± 11.8 歳）を対象とした。

[方法]訪問リハビリ終了時の Frenchay Activities Index (FAI) の趣味項目を調査し、0 点を趣味未獲得群（53 名）、1 点以上を趣味獲得群（16 名）とし 2 群に分類をした。両群において、訪問リハビリ終了時の Functional Independence Measure motor (FIM-M)、FIM cognitive (FIM-C)、Brunnstrom stage (BRS)、Life Space Assessment (LSA)、訪問リハビリ利用期間、発症からの日数、性別、年齢、麻痺側（左右）を調査し、Mann-Whitney の U 検定とカイ二乗検定を用いて比較した。なお本研究は、臨床で得たデータを匿名化処理して構築したデータベースを用いて後方視的に調査し、当法人倫理委員会の承認を受けている（受付番号 089-03）。

[結果]FIM-M、FIM-C、BRS、LSA では両群間に有意差を認めた ($p < 0.05$)。訪問リハビリ利用期間、発症からの日数、性別、年齢、麻痺側（左右）では両群間に有意差を認めなかった。

[考察]趣味活動が獲得された利用者の特徴は、身体機能、動作能力ともに高かった。

このことは、訪問リハビリの介入は、重症者に比し軽症者では、趣味活動の獲得に有効であることを示している。この要因として、軽症者は、身体機能と動作能力が高いため、獲得できる趣味活動の選択肢が多いことが考えられる。さらに、身体機能や生活動作に関する問題が少ないため、趣味活動といった社会参加に対して訪問リハビリが積極的に関わっている可能性が高い。以上より、訪問リハビリは、ADLの問題が少ない利用者に対しても、趣味活動の獲得を促進するため、有効活用されるべきであり、このことは介護予防等にも寄与するものと考えられる。